農 業 技 術 情 報

令和６年６月１５日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ十勝池田町　572-3131
高島支所　573-2111
池田町農林課　572-3118

農作物の生育・作業の遅速（6月15日現在）　　（ ）内は平年値

作　物　名	遅速日数	生　育　状　況		農作業状況
秋まき小麦	-2	草丈　83.3 (79.1)cm 茎数　713 (702)本/㎡	出穂期 6/ 5 (6/ 2) 出穂揃 6/ 8 (6/ 5)	
ばれいしょ	-7	茎長　7.9 (18.1)cm 茎数　3.7 (3.5)本	萌芽期 6/ 5 (5/28) 着蕾期　(6/13)	
大豆	+1	茎長　12.9 (9.2)cm 葉数　1.8 (1.2)枚	出芽期 5/28 (5/27)	は種期 5/15 (5/14) は種終 5/19 (5/18)
小豆	±0	茎長　3.4 (3.3) 葉数　0.5 (0.4)	出芽期 6/ 5 (6/ 3)	は種期 5/21 (5/20) は種終 5/24 (5/24)
菜豆（金時）	+1	茎長　9.1 (6.4) 葉数　0.3 (0.3)	出芽始 6/ 6 (6/ 5) 出芽期 6/ 7 (6/ 8)	は種期 5/28 (5/26) は種終 6/ 3 (6/ 2)
菜豆（手亡）	±0	茎長　7.8 (5.0) 葉数　0.4 (0.4)	出芽始 6/ 4 (6/ 3) 出芽期 6/ 5 (6/ 5)	は種期 5/27 (5/25) は種終 5/31 (5/30)
てん菜（直播）	-6	草丈　16.5 (20.7)cm 葉数　9.5 (11.7)枚		
牧　草	+3	草丈 105.6 (97.1)cm	出穂期 6/10 (6/13)	収穫始 6/11 (6/12)
サイレージ用とうもろこし	±0	草丈　37.6 (32.5)cm 出葉数 5.7 (5.9)枚		
たまねぎ	-	草丈 42.7 cm　生葉数 6.2 枚　葉鞘径 12.7 mm		

＜秋まき小麦＞

1赤かび病の防除

秋まき小麦でほ場内の生育が早い部分に合わせて１回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、２回目以降の防除を実施してください。

表１　赤かび病の防除体系

防除時期	農薬名	使用濃度（倍）	使用時期	回数（以内）
２回目 （１回目の７日後）	ミラビスフロアブル	1,500	収穫７日前まで	２回
３回目 （２回目の７～10日後）	バラライカ水和剤※１	500	収穫14日前まで	２回
臨機	チルト乳剤２５	1,000～2,000	収穫３日前まで	３回

※１バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。
①バラライカ水和剤　→　②硝酸カルシウム（物理性の問題のため）
※ＤＭＩ剤は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるので飛散に注意する。

2 葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的に窒素の葉面散布を行う場合、「尿素使用の場合は1.0～1.5%液を3回（窒素成分で1回0.5～0.7kg/10a)」で検討してください。

＜注意事項＞
1　過去にタンパクが高かったほ場では、葉面散布の要否を検討しましょう。
地力が高い・前作による窒素のあと効きが予想される場合は実施を控えましょう。
2　尿素の散布濃度は1.5%以下としましょう。
3　高温時の葉面散布は葉やけの原因となるため、高温時の散布を避ける、尿素濃度を下げる（濃度１%以下）などの対応が必要です（尿素単独の場合)。
4　尿素の葉面散布と防除を同時に行う場合は、薬害の発生を助長するので、尿素濃度を１%以下にし、展着剤の使用を避けてください。

3 赤さび病の防除

ほ場を確認して、発生が確認された場合は臨機防除で対応しましょう。

表２　赤さび病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率(倍)	使用時期	回数(以内)
ミリオネアフロアブル	4,000	収穫７日前	２回

※既発生の場合は、4,000倍をお勧めします。
「ミリオネアフロアブル」と「ミラビスフロアブル」は同一系統の薬剤となるため、連用しないよう注意しましょう（耐性菌予防のため)。

4 アブラムシ類、ムギクロハモグリバエの防除

アブラムシの発生が見られます。ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【アブラムシの要防除水準】
出穂10日後頃、７～11頭寄生した穂がほ場全体で45%以上で防除を実施する

【ムギクロハモグリバエの要防除水準】
・６月下旬に50茎の上位２葉を確認
・葉面積の約1/2以上の被害茎数割合が16%を超えていれば防除を実施する

表３　アブラムシ類、ムギクロハモグリバエ等の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	アブラムシ類	ムギクロハモグリバエ	使用時期（収穫前）	回数（以内）
ペイオフＭＥ液剤	2,000	●		７日	２
スミチオン乳剤	1,000	●		７日	１
エルサン乳剤	1,000	●	●	７日	４

5 小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。

感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、図を参考に万が一疑わしい株を発見したら、JA または普及センターにお知らせください。

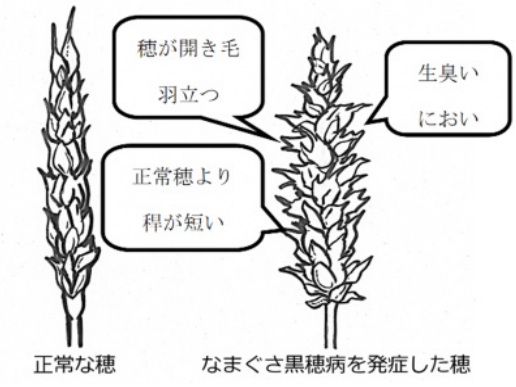


図１　なまぐさ黒穂病の特徴

＜てんさい＞

1 てんさい根腐病の防除

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が続く場合は、２回目の根腐病防除を検討しましょう。

表４　根腐病の防除薬剤例（株元散布）

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
ミリオネアフロアブル	4,000	７日	４回
リンバー顆粒水和剤	4,000	７日	３回
モンセレン顆粒水和剤	1,000	30日	４回（育苗中含む）

2 褐斑病の防除

病原菌は 30℃で７～８日、25℃で９～10 日、15℃で 19～21 日間潜伏し、７～８月の高温多雨により急速に発生が広まります。若い葉は老葉に比べ病原菌の潜伏期間が長く、病斑数も少ないため、下位葉を中心に観察し、予防防除を徹底しましょう。

表５　てんさいの褐斑病防除薬剤例

農薬名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
ダコニールエース	750	30日	3回

3 アブラムシ類・カメノコハムシ・ヨトウガの防除

モモアカアブラムシによるテンサイ黄化病（西部萎黄病）の被害防止は初期防除が重要なため、防除を徹底しましょう。

ヨトウガの飛来が早いように見受けられます。ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減するため、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表６　アブラムシ・ヨトウガ・カメノコハムシの防除例

防除時期	病害虫	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
6月25日	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類 ﾖﾄｳｶﾞ ｶﾒﾉｺﾊﾑｼ	リーズン顆粒水和剤	3,000	14日	２回

※リーズン顆粒水和剤はアクタラとマッチの混用剤です。マッチは殺卵効果がありますが、老齢虫には効果が低いので遅れずに防除してください。

防除時期	病害虫	薬剤名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
７月20日	ﾖﾄｳｶﾞ	ペイオフＭＥ液剤	2,000	14日	４回
		または			
		ゲットアウトWDG	3,000	14日	４回

4 てんさいの中耕

(1)　土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。

(2)　中耕の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに、次第に狭く深く調整して、畦間が茎葉で覆われる時期（草丈 35cm くらい）までに実施しましょう。

(3)　中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

5 除草剤散布

(1)　除草剤のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、実施しましょう。

(2)　直播てん菜は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

＜ばれいしょ＞

1 疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18～20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地（排水不良箇所)、トラクタの車輪のぬかるんだところ（防除畦など)、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。

(1)　初発前に必ず防除：ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。

(2)　初回の防除前に感染が疑われる場合：治療効果のある薬剤を使用。

(3)　作物の生育に応じた薬剤選択：茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。

(4)　降雨に応じた薬剤選択：ほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル（14日間隔）効果のある薬剤※の使用を検討してください。

※【Wインターバル対応薬剤例】
「リライアブルフロアブル800倍」、「プロポーズ顆粒水和剤750倍」、「ライメイフロアブル2,000倍」、「レーバスフロアブル1,500倍」、「ランマンフロアブル1,000倍」、「フロンサイドＳＣ1,500倍」（平成25年度指導参考)。

表７　疫病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現
グリーンダイセンM水和剤	400～600	７日	10回	予防
リライアブルフロアブル	800～1,000	７日	３回	予防・治療
ゾーベックエンカンティアSE	2,000	14日	３回	予防・治療
フロンサイドＳＣ※１	1,000～2,000	７日	４回	予防
プロポーズ顆粒水和剤※２	750～1,000	７日	５回	予防・治療

※１　「フロンサイドＳＣ」は1,000倍で菌核病、2,000倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

※２　「プロポーズ顆粒水和剤」は夏疫病に登録あり。

2 夏疫病の防除

夏疫病は多湿と高温乾燥が繰り返されると発生が多くなります。疫病との同時防除で対応しましょう(表7参照)。

3 菌核病の防除

落下花弁が葉などに付着し、白色綿状のかびを発生し、そこから腐れが広がっていく病害です。低温多湿条件で発生し、多発すると早期枯凋させて被害をもたらします。発生が確認された場合、疫病との同時防除で対応しましょう(表7参照)。

4 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降（７月上中旬）となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を行いましょう。初期防除を心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表８　軟腐病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	効果の発現
スターナ水和剤	1,000	７日	５回	予防・治療
バクテサイド水和剤	750～1,000	７日	５回	予防・治療
マテリーナ水和剤	1,000	７日	３回	予防・治療
カスミンボルドー カッパーシン水和剤	500～800	７日	３回	予防・治療
マスタピース水和剤	1,000	前日	―	予防

※１　オキソリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。また、オキソリニック酸を含む剤の使用は合計５回までとする。

※２　ストレプトマイシンを含む剤の使用は合計５回までとする。

5 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

ナストビハムシは、林地や防風林近くの多発に注意しますので、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。ナストビハムシの成虫は、６月中～下旬頃に侵入します。

<豆類>

1 中耕

初期生育を確保するため、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(７月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2 大豆「わい化病」・金時「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

病害虫発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「やや早」・発生量は「やや多」との予測になっております。

出芽揃期とその７～10 日後にペイオフＭＥ液剤等による防除を実施してください。

（クルーザーＭＡＸＸまたはＦＳ３０を使用した場合は、出芽揃期の防除は不要です）

3 小豆「褐斑細菌病」の防除

６月中旬から初生葉に病斑がみられ、その後７月中旬頃が冷涼多湿な場合に急激にまん延します。また、発生時の中耕除草作業で発生範囲がさらに広がります。

初発が確認された場合は、速やかに抜き取るとともにカスミンボルドーによる防除を実施し、その１週間後に２回目の防除を実施してください。

4 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表９　小豆「茎疫病」の防除薬剤例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数
ランマンフロアブル	1,000	７日	３回以内
レーバスフロアブル	2,000	７日	３回以内

5 小豆チョウ・ガ類、アブラムシ類の防除

マメアブラムシは局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し寄生が目立ったら早急に防除してください。

表 10　小豆チョウ・ガ類、アブラムシ類の防除薬剤例

対象害虫	農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
ツメクサガ	トクチオン乳剤	1,000	30日	２回
アブラムシ類	モスピランＳＬ液剤	2,000～4,000	14日	３回
	ウララＤＦ	4,000	７日	２回
アブラムシ類	スミチオン乳剤	1,000	21日	４回
アズキノメイガ	プレバソンフロアブル５	4,000	７日	２回

6 菜豆（金時）「かさ枯病」の防除

かさ枯病にり病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。子葉展開期から２回、防除を実施しましょう。

7 菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、６月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

8 豆類の窒素追肥

根粒菌が行う窒素固定量は、豆類の生産性を大きく左右します。

大豆＞小豆＞菜豆の順に根粒菌による窒素固定量が多く、根粒菌の着生量が少ないほど、追肥が必要となります（大豆の場合、開花期頃に 10 個／個体未満で要追肥）。

生育量や地力、根粒菌の着生と活性状況に応じて、追肥の要否を検討しましょう。

表 11　豆類の窒素追肥時期と追肥量の目安

作物名	追肥時期	追肥量の目安	備　　考
大　豆	開花始頃	Ｎ：２～４ kg/10ａ	生育後期に窒素供給が多いほ場では追肥量を減らす。
小　豆	第３本葉展開期前後（７月中旬頃）		
金　時	開花期頃		葉落ちが悪いほ場では追肥量を減らす。 生育後期に多量の窒素が供給されるほ場では追肥量を減らす。

野　菜

今後、気温の上昇が予想されます。引き続き病害虫の発生に注意してください。

＜たまねぎ＞

1 除草剤の使用

早生品種で出葉数６葉、中晩生品種で出葉数７～８葉以降の除草剤散布は、ムケ玉の発生原因になるため、除草剤の散布は避けましょう。

2 白斑葉枯病の防除

・平年の初発は６月中旬頃です。初発を確認次第できるだけ早く（初発の５日以内）防除しましょう。初発後のフロンサイド SC 1000 倍での防除が効果的です。その後は定期的な予防防除に努めてください。

・白斑葉枯病は２日以上の連続した降雨、または 10㎜ 以上のまとまった降雨後 7 日間、特に平均気温 18℃以上の温暖な日に初発の可能性が高くなります

3 細菌性病害（軟腐病・りん片腐敗病）

・激しい降雨や追肥、手取り除草などの茎葉の損傷からの発生する場合があります。発生前からの予防防除を心がけてください。

◇細菌性病害の発生環境

軟腐病　：25℃以上の高温多湿条件下で発生しやすい。特に多肥栽培では過繁茂になり、発生が助長される。

りん片腐敗病：18℃前後の比較的低温で降雨が続くと発生が増加する。

表１　たまねぎ細菌性病害の防除例（Yes！Clean）

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数	白斑葉枯病	小菌核病	べと病	軟腐病
7月上旬	パレード20フロアブル	2,000～4,000	収穫前日	3回以内	1	○	○		
	バクテサイド水和剤	500～1,000	収穫7日前	5回以内	0				○
7月中旬	フロンサイドSC	1,000～2,000	収穫3日前	5回以内	1	○		○	
	アグレプト液剤	1,000	収穫7日前	5回以内	0				○

４ ネギアザミウマの防除

今後、高温少雨で経過すると発生量が増加していきます。ほ場を確認し、防除を実施してください。

表2 ネギアザミウマの防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	成分回数
７月上旬	ディアナＳＣ	2,500～5,000	収穫前日	２回以内	1
７月中旬	アドマイヤー顆粒水和剤	5,000～10000	収穫14日前	２回以内	1

＜ヤマノイモ＞

１ マルチ栽培での芽やけ対策（スリットからの芽出し）

・マルチのスリット部に芽が引っ掛かっているものは速やかに出して、芽やけ（高温障害）を防ぎましょう。

・つるが伸びてきたら早めに、つる折れ防止のためにネットへの誘引も行いましょう。

２ 中耕と埋め戻し

・６月下旬頃から根が畝間に伸び始めます。遅くなると根を切る可能性があるため、７月上旬までに終わらせましょう。

・トレンチャー溝の陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行ってください。

３ アブラムシの防除

アブラムシはウイルス病を媒介します。特に種子ほ場では、アブラムシの発生が確認された際は防除を実施してください。

表３　アブラムシの防除薬剤

薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
オルトラン水和剤	1,000	収穫45日前	1回以内
モスピランSL液剤	4,000	収穫7日前	3回以内
アディオン乳剤	2,000～3,000	収穫7日前	5回以内

４　除草剤の生育期処理

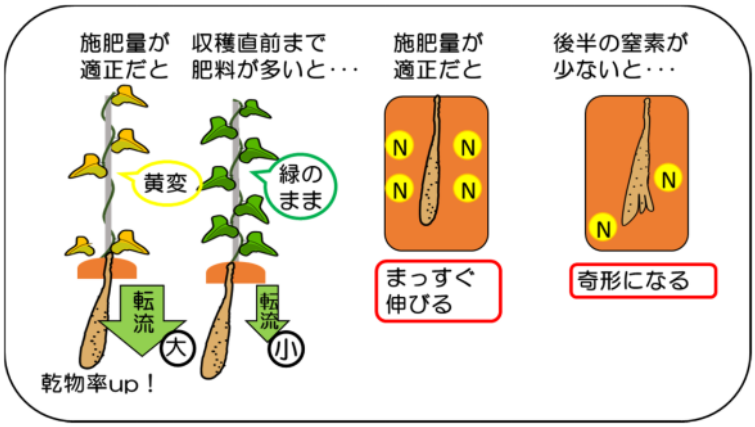
・畦間土壌処理は、茎葉（下葉）に飛散しないように行ってください。

５　分肥の施用時期(とかち太郎)

・分肥を行う場合は、７月下旬までに実施してください。

・とかち太郎は従来品種（川西系統）よりも後半の生育が旺盛です。緩効性肥料を使用していない場合は、安定栽培のために分肥を実施してください。

・過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になります。分肥する際は基肥量も確認し、適正範囲内で実施してください。



＜にんにく＞

１　摘蕾と収穫

玉の肥大を促すために摘蕾を行ってください。摘蕾の目安は止葉と花蕾（トウ）の高さが同じくらいになった時です。また、収穫は晴天日に実施してください。

２　病害虫防除

・例年６月中旬からネギコガ、ネギアザミウマの発生がみられます。適宜防除を実施してください。

・葉枯病は雨が多く、温度が高い時、肥料切れなど草勢が衰えた時に発生しやすくなります。収穫前日数を考慮し防除を行いましょう。

＜かぼちゃ＞

1 果実斑点細菌病の防除

多湿条件下で発生しやすいため、開花７日前頃から予防防除を実施してください。

【主な症状】
葉　　：水浸状の小斑点、降雨が続くと葉脈に囲まれた病斑となり、中心部が破れる。葉の縁から水浸状に変色して、やがて黒褐色になり枯れ上がる。
つ る：水浸状に陥没し、やがて白色の紡錘状病斑となる。
果 実：始め幼果に水浸状でやや陥没した病斑を形成、やがて周囲が隆起する。

表4　かぼちゃ果実斑点細菌病の防除薬剤

薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
Ｚボルドー	500	－	－	薬害軽減のため、クレフノン200倍を加用し、高温時の散布は避ける。

2 アブラムシの防除

防除の際は、ミツバチへの影響を考慮しミツバチへの影響が少ない薬剤を選定しましょう。

〈注意点〉
- ミツバチを導入する場合は導入前に、ミツバチへの影響が少ない薬剤（モスピランSL液剤）で防除を実施してください。
- ミツバチ導入後も、活動に影響の少ない薬剤（モスピランSL液剤）を選択し、活動が活発な時間帯（午前８時～１２時）の散布は控えてください。

表5　アブラムシの防除薬剤例

使用時期	農薬名	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
着果前～着果期	モスピランＳＬ液剤	2,000～4,000	収穫前日	２回以内
着果後	エルサン乳剤	1,000～2,000	収穫３日前	３回以内

※薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。
※薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

～～農薬の安全使用と農作業安全に努めよう！！～～

□農薬危害防止活動の実施

★農薬の使用基準や注意事項を確認し遵守しましょう。
★除草剤等の散布でスプレーヤを使用する際には周辺作物への飛散防止に努めましょう。
★農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
★使用した農薬容器や袋は、適切に洗浄や処分しましょう。
★農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

□　春の農作業安全運動強調月間（4～6月）

「焦り」や長時間作業の疲れによる「不注意」などに伴う農作業事故の発生が懸念されます。
★機械の調整・整備等の際は、必ずエンジンを止めましょう。
★必ず機械を止めてから乗り降りしましょう（飛び乗り、飛び降りはしない）
★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合いましょう。

土壌診断を活用しましょう

土壌診断を実施し、適切な肥料選定をすることで、養分バランスの適正化とコスト節減に活用しましょう。
特にリン酸・カリの蓄積が進んでいるほ場が多い傾向にありますので、土壌診断に基づき、適切な施肥設計を行いましょう。
※生育期間中でも、畝間から土壌サンプルの採取は可能です。